

横井小楠 —その業績と生涯—



四時軒^{しじげん}*が建つ沼山津で50歳を迎えた小楠は、越前藩^{えちぜんはん}の招きにより、福井に行きます。これが小楠と越前藩との交流の始まりですが、交流が決まるまでに約1年もかかっています。交流は1858年から1863年までの6年間で4回行われました。この間、小楠は福井あるいは江戸^いに居て、越前藩主などを補佐し、越前藩や幕府の政治改革に力を尽くしています。



▲小楠が福井に滞在したことを記す石碑
(福井市にある小楠の寄留先跡)

11 越前交流の始まり

安政5年(1858)3月、小楠は、越前(福井)藩主松平慶永(のち春嶽)^{まつだいらよしなが しゅんがく}*に招かれました。福井に着くと、賓師^{ひんし}*として迎えられ、50人扶持^{ぶち}* (90石)の待遇を受けました。

さて、小楠と越前藩との関係は、9年前の嘉永2年(1849)10月、越前藩士三寺三作^{みつでらさんさく}が諸国巡遊の途中、熊本城下の小楠堂を訪れたことがきっかけです。三寺により小楠の名は福井に伝わりましたが、2年後の小楠の諸国巡遊でも小楠自ら20数日間福井に滞在して同地の有名な学者などと交わり、講演も行いました。その後、小楠は同藩の求めに応じて『学校問答書^{まじ}*』を著し、越前藩に贈っています。

ところで、当時の日本周辺には外国船がしきりに渡来していました。そのため日本海に面した越前藩では、特に海防^{かいぼう}(海岸の防備)の重要性と文武振興の必要から、これらを達成するための見識^{けんしき}*のある人材を求めています。

藩主の慶永は小楠とは直接会ってはいませんでした。本藩での小楠の評判や『学校問答書』などを読んで、小楠の優れた考えや学問の深さを知り、小楠を越前藩に招く決意をしました。そして、安政4年(1857)3月、家臣の村田氏壽^{つじひさ}を熊本に派遣し、小楠を招きたいという気持ちを伝えました。小楠は藩主直々の招きと越前藩の知り合いの懇請^{こんせい}で越前行きを内諾^{ないだく}しました。そこで、同年8月、慶永は肥後藩主細川斉護^{なりもり}*に手紙を贈り、小楠招聘^{しょうへい}*についてお願いしました。

ところが、肥後藩は断りの返事を出しました。その理由として、「小楠は、才気はあるようだが、実学などの流派をつくり藩校の学風を批判している。政治についての考え方にも不安がある。」などを挙げています。これに対し、慶永や重臣たちは諦めず、斉護らに幾度も要請した結果、やっと肥後藩の承諾^{しょうだく}を得ることができたのです。

福井での初仕事は藩校明道館での講義や来訪者への応対などでしたが、藩主には江戸滞在のため会えませんでした。

※四時軒…当時の四時軒(2月号掲載の写真)は撤去され、昭和57年に現在の横井小楠記念館の一部として復元された。

※松平慶永(1828～90)…幕末の越前藩主(32万石)。のちに春嶽^{しゅんがく}を名乗る。世界的視野に立って開国論を唱え、政事総裁職として朝廷と幕府が協力し合うように努めた。

※賓師…越前藩の先生としての待遇を受けた。

※1人扶持…1日玄米5合(1年間1.8石)を給与された。

※『学校問答書』…問答書の中で、小楠は「学校の設立は、君主や一門などの学問研究の心がけが大切であり、学問と政事を一致させる大本^{もと}が立てば興すべきだ」と言っている。

※見識…すぐれた判断力やしっかりした考え。

※細川斉護(1804～60)…第12代藩主。幕末の時期に当り、藩財政の極度の困難、外国船渡来による浦賀(現在の神奈川県)等警備の幕命、藩内での実学党と学校党の対立などがあって苦心した。なお、三女勇^{いさ}は松平慶永夫人。

※招聘…礼儀をつくして丁寧^{ていねい}に招く。

このコーナーは、菅 秀隆さん(元横井小楠記念館長)が執筆しています。